



朝

鮮

雲

和

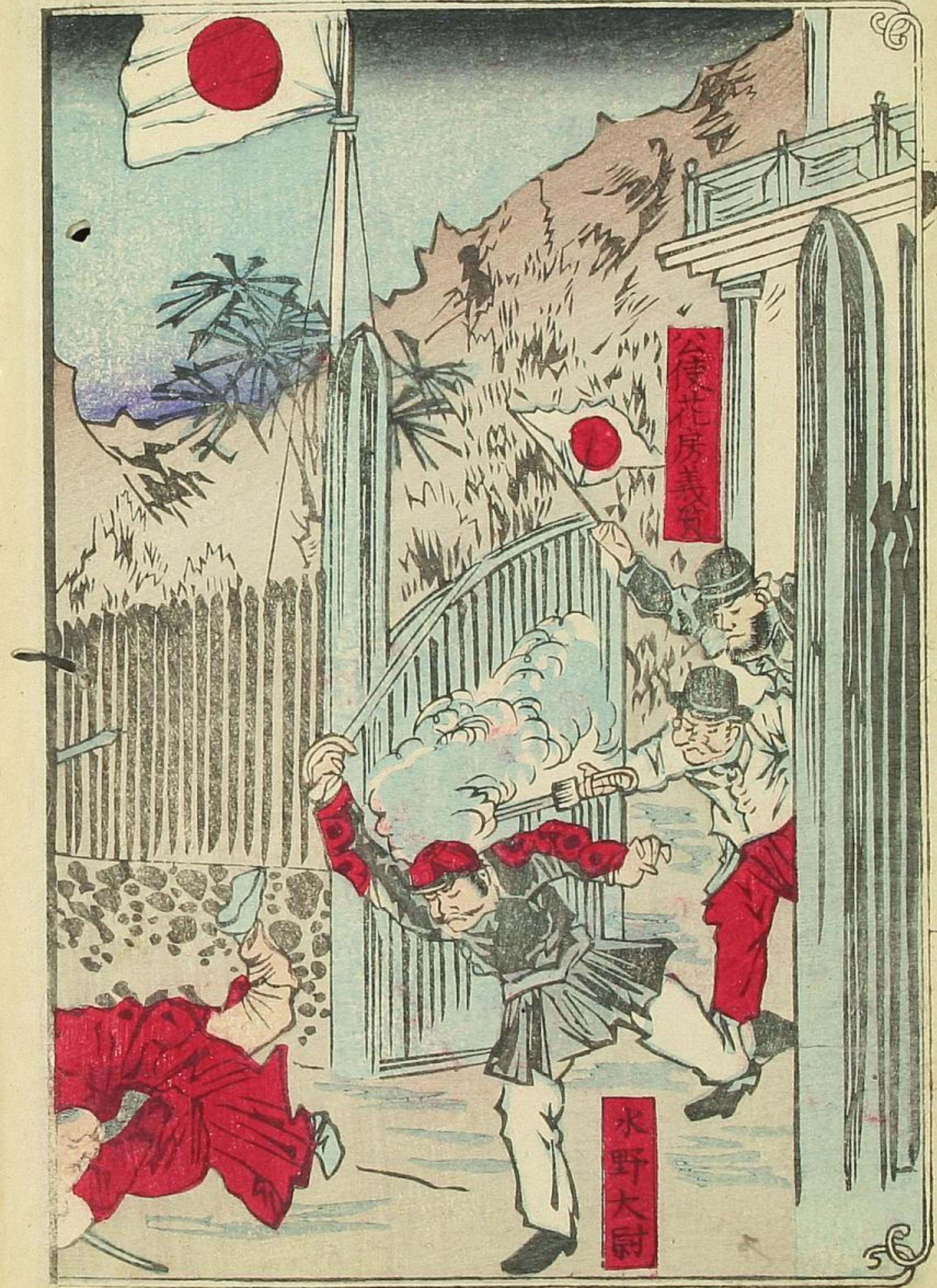


<48-8402>

卷中遭難人名

△印戰死セ

全權公使花房義質 領事近藤真鋤 陸軍歩兵大尉水野勝毅
 全中尉松岡利治 全工兵中尉堀本禮藏 全歩兵軍曹千原秀三郎
 全省語學生徒武田甚太郎 岡田某池田某黑澤某 海軍中軍医佐
 川晃 二等警部岡兵一 一等巡查小林志津三郎 全廣戸昌克
 △全二等官銅太郎 全遠矢庄八郎 全五十嵐惠吉 全川上健助 全池田
 為義 全三等横山貞夫 全本田親友 七等属浅山顯藏 御用掛杉村
 溶 全久水三郎 全大庭永成 全曾廣輔 公館雇高雄謙三 全水島
 義 全鈴木金太郎 全飯塚玉吉 其他公使領事の従者等



繪本朝鮮異聞初篇

訥亭 岡本 湖月 編

朝鮮國我邦と約を結び通信貿易を開くと當り我政府ハ特ニ全權公使ヲ遣リ館を京城ニ營て爰ニ居リ彼我交際ノ事柄より其他百般ノ事務ヲ執らしむ時ニ明治十五年夏七月思ひよらざる變事ト起リ是月二十三日午後五時ごろ京城ノ我公使館へ宛て亂民兵隊と合し襲來る模様ありとの書狀が届きしが斯る惡戯を以る人を驚かし事ハ度々なきバ公使館の人も左

のこ心も止めぬ不居る處へ差備官李承謨堀本中尉が兵制を傳習をうららの士官みて尹雄烈の下役が驅け來り暴民來襲の事を告げしゆえスハ大變なりと防禦乃用意を以る折しも公使館雇ひの朝鮮人が大わらひにて走せ付け只今陸軍語學生三名が練兵所より歸り道暴民の爲め不取圍まれ命も既不危ふしと息を切ての注進不打捨て置るまはと巡查三名が救ひ出さば程もあらせば公使館の後ろに當りドット揚げとる鯨波不驚いて顧り見まは裏手の山ハ暴民が雲霞の如く



語學生
途中
暴徒
残害

月羊切



京魚

押寄せ石瓦を雨の如く投げ落し中み鉄砲を打込め
 如何み防がんと手術もなく館門を閉ぢて表口の来襲
 を防ぐうち火を放ちたる者ありて見るうち火の手ハ
 燃え擴がり焔煙空を蔽ふと瞬間に公使館も焼落ち残
 し公堂と清遠閣といふ接待所の屬官淺山頭藏巡
 査小林志津三郎ハ短銃を以て放火者を狙撃し四五人
 を斃せしゆと暴徒ハ少く躊躇しども四方の圍にハ
 多く重なりて銃を放ち矢石を飛がし叫きさけん
 門まで攻め寄館内へ打入り者一人もなきをば人々

心み思ふやう暫く支へし時を移さば朝鮮政府より兵
 隊を出して必ら此暴徒を鎮壓するらん銘々死力を
 を盡して相防ぎ其夜十二時ころ及ぶといへども政
 府より救ひの兵ハ出さば暴徒ハ追々勢加えり笛を鳴
 らし鯨波を作りたまさき有様なきをば一同ハ公堂に
 集り公使の令を出さるるを待つ水野大尉先づ曰く事
 既に爰に迫る從容此處に死を待つや或ハ一方を突抜
 き脇をぬきても暴徒共を切り散らし運を武力に試
 ん水島小林ハ突出して後山に登りて間道より揚華津



奮戦突戦
死を決して
血路を開く



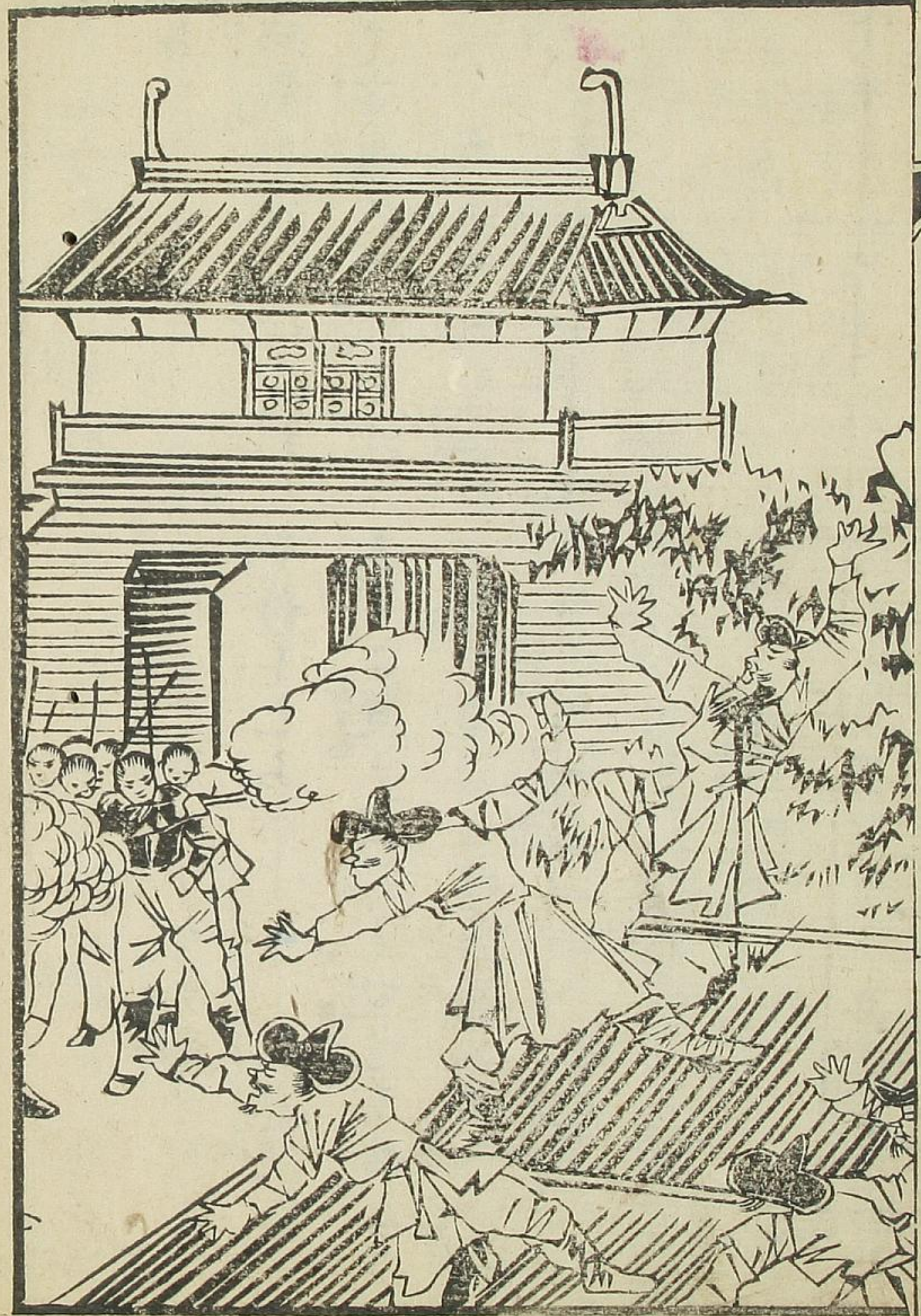
不出づと云ひ岡警部（うらたけのぶ）の後山（うしろのやま）の路嶮（みちのあやう）一（ひと）同（どう）
 が揃（そろ）ての登（のぼ）らるるを敵山（てきやま）上より拳下（こぶしした）すふ打（うち）たれたる徒（たて）
 らみ矢石（やせき）の爲めふ命（いのち）を隕（おち）さん夫（お）よりハ正門（せいもん）を開（ひら）けし
 敵（てき）を引受け死人（しにん）の山（やま）を築（きず）き日本男子（にっぽんなんし）の武勇（ぶゆう）の程（ほど）を示
 してととさんと評議（ひょうぎ）區々（くく）なきは其決（そのけつ）を公使（こうし）み乞（こ）ひし
 花房公使（はなぼうこうし）の形（かたち）を正（ただ）し曩（な）小韓人（せうかんじん）の報（あやせ）小依（よ）き王宮（おうきゆう）並（なら）し
 関氏（せきし）の邸（やしき）をも亂民（らんじん）が襲（おそ）ひしとの事（こと）なきは容易（やす）の暴徒（ぼうと）
 にあらび斯（か）る變事（へんじ）遭（あ）ひし一身（いつしん）の存亡（ぞんぼう）より詮（せん）むる
 所（ところ）ハ國威（こくゐ）を辱（はづ）しめざる（せ）み在（あ）り暴徒（ぼうと）何千人（なんせん）ありとも是（こゝ）

皆烏合（みなくわが）の集（あつ）り勢（いきり）紀律（きりつ）なく隊伍（たいぎ）整（ととの）えね破（やぶ）る難（たが）き事（こと）
 ありべのらむ一（ひと）まづ正門（せいもん）より突出（とつしゅつ）して大路（だいろ）を經（へ）て京（きやう）
 城（じやう）觀察使（くわんさつし）の營（えい）に到（いた）り守護（しゆご）を乞（こ）ふべし若（も）し觀察使（くわんさつし）
 て守護（しゆご）ける能（あた）るべし王宮（おうきゆう）趣（おもむ）き國王（こくわう）と安危（あんき）を共（とも）みし
 べし我國（わがくに）の恥（はにか）を山野（やまの）小曝（せう）を事（こと）なりきと云（い）ふ人々（ひとびと）一（ひと）
 致（いた）して隊伍（たいぎ）を整（ととの）へ番號（ばんごう）を定め總員（そうゐん）二十八人（にじゅうはちにん）岡淺山（おかせんざん）を
 先鋒（せんぽう）とし千原水島（ちげんみづじま）を跡備（あとび）へし死（し）を決（けつ）し勇氣（ゆうき）を
 るとくドツと喊（こゑ）いて叢（むら）がる暴徒（ぼうと）の中（なか）へ切り入り當（あた）り
 を幸（さい）ひ二十余人（にじゅうににん）を斬倒（ざんたう）せば怖（おそ）きでサツと左右（さうりやう）へ分（わ）る



公使の一行
 觀察使の
 營に到りて
 守護を乞
 えんとし

月
 洋
 切



草
 魚
 初

中ちゆう一いつ條じょうの血路けつろを開ひらき大だい路ろ小せう出して觀かん察さつ使しの營えい小せう到たうき
 門もんへ開ひらけて守まもる人ひとなく大だい門もんの内うち小せう入いきバ樓ろう上じやうより
 四し五ご人にん瓦わを擲なるもれあきバ短たん銃じゆうに脅おびく三さん門もんを過か
 ぎて宣せん化わ堂だう小せう至しるよ寂じやくとして音おともなう察さつするよ觀かん察さつ
 使しもなう王わう宮きゆう小せう入いるならんと足あしををやめて王わう城じやうの
 南なん大だい門もん小せう至しる扉ひらをうけた門もん將じやうを呼よべとも絶つて答こたふる
 者ものなく南なん大だい門もんといふハ一いつ小せう崇しゆう禮らい門もんと云いひ其その形かたち切きり
 石いしを疊かさきて穹くわう隆りゆう狀じやうをうへ上うへ二に層そうの櫓りゆうを置おく門もんの扉ひら
 ハ皆みなを鏡きやうをゆつて包かく王わう宮きゆう八はち門もんの中ちゆうみてもつとも宏こう

大だいなる門もんなり花はな房ぼう公こう使しの行かうハ爰こゝ小せう至しる大だい音おん揚やうげ
 名なを通とほるも鏡きやうの扉ひら固かたく鎖さく音おともなう公こう使しも今いま
 ハ我われ方も是こゝ小せう於おく盡つまり寧なろこの地ち小せう在あつて襲しゆう撃げき
 を受うけんより一いつ小せう揚やう華わ津しん小せう至しる後のちの圖ずを運ゆらさ
 んとこをより道みちを轉てんじて揚やう華わ津しん小せう向むかふ折せりしも降あめ雨めを
 げしくしと帽ぼうも衣い服ふくも雨あめ霰せんと濡ぬき浸ひり道みち路ろハ暗くらく
 て志しばく岐ぎ路ろ又また迷まふし振ふつものへれバ又また公こう使し館かん
 のまが焼やけ落おちぬ火ひの光ひかり至いたる空そらみりつりて志しまふこ
 互たがひ願ねがひを情じやう怒どの氣き胸ちゆうみせまり歎なげ息いきの外ほかなり

一が夜通し走馬して二十四日の明方揚華津不達し
 此處の鎮兵隊の屯所は依りて京城の様子を聞かん
 と思へど微弱しを頼むは足らざれば一書を鎮將に
 托して同文司經理事並びに京城觀察使に寄せ其大
 意へ前日來の形勢の大畧を述べ政府の兵を出しを保
 護するを待てども一人の兵士も至らざれば王宮に到ら
 んとされば南大門開くは己むを得ず避けて仁川府に
 かむむらんとせしむ望むらくは貴國政府速くは亂民
 を鎮壓するの計をなはせとめふことありきより同

舟を出て渡口に臨み渡守を呼ぶども皆を逃げ散りて
 來しものなるを淺山に川縁を駆け廻つて一艘の
 船を得來り自ら艦を押し人々を渡り前夜よりの暴
 風雨に雷鳴さへ加わり道路は恰も沼の如く一足づ
 づ疲乏を覺え午前十時より富平の咸谷里といふ處
 ありしところの百姓家に入り麥を炊かせて飢を凌
 ぎ暫らく勞きを休めり

朝鮮異聞初篇終

編者曰次に出せる圖は彼の國王城の地形及仁川港
 の槩畧を示しし者ありて本文を讀む人の便に供す

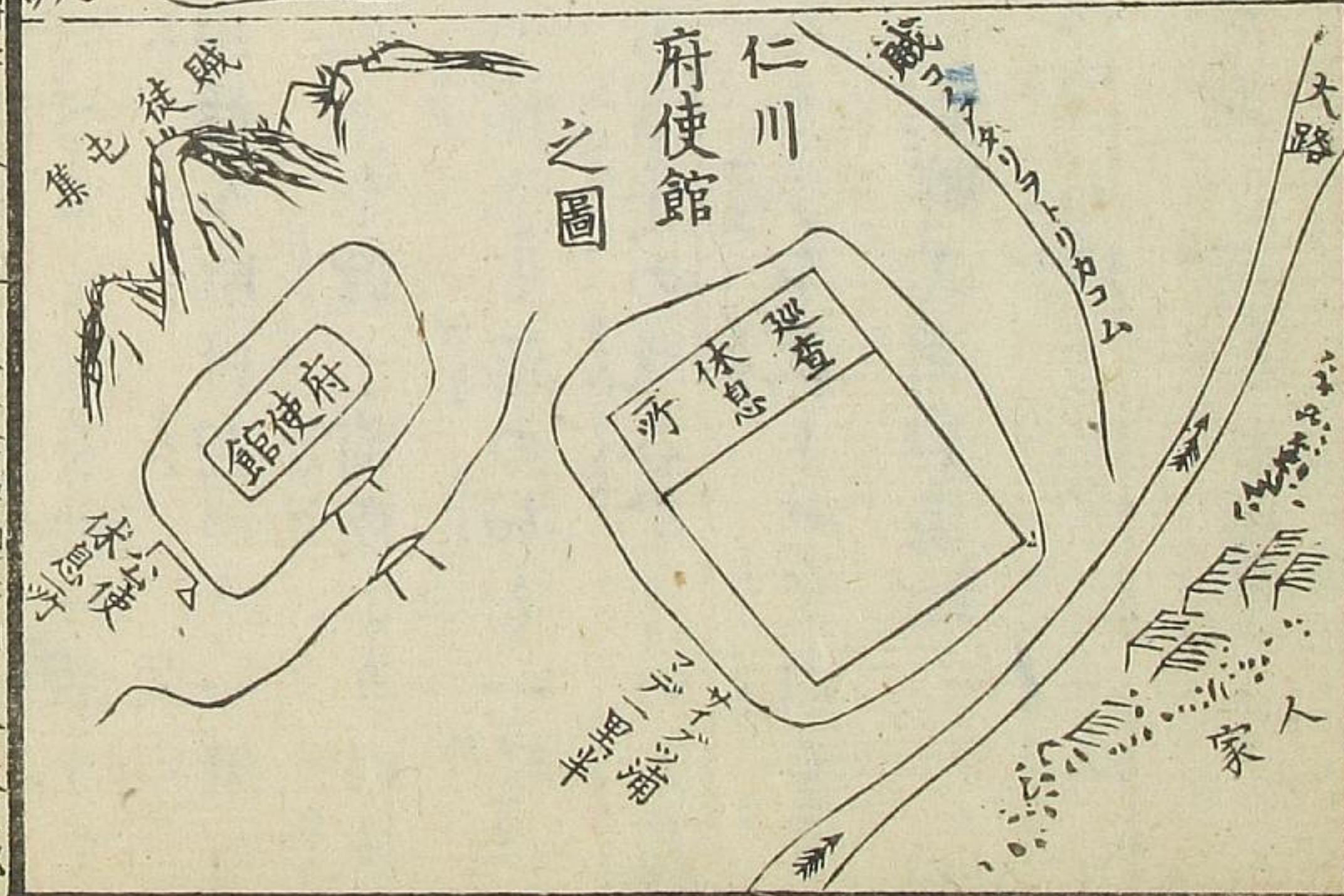
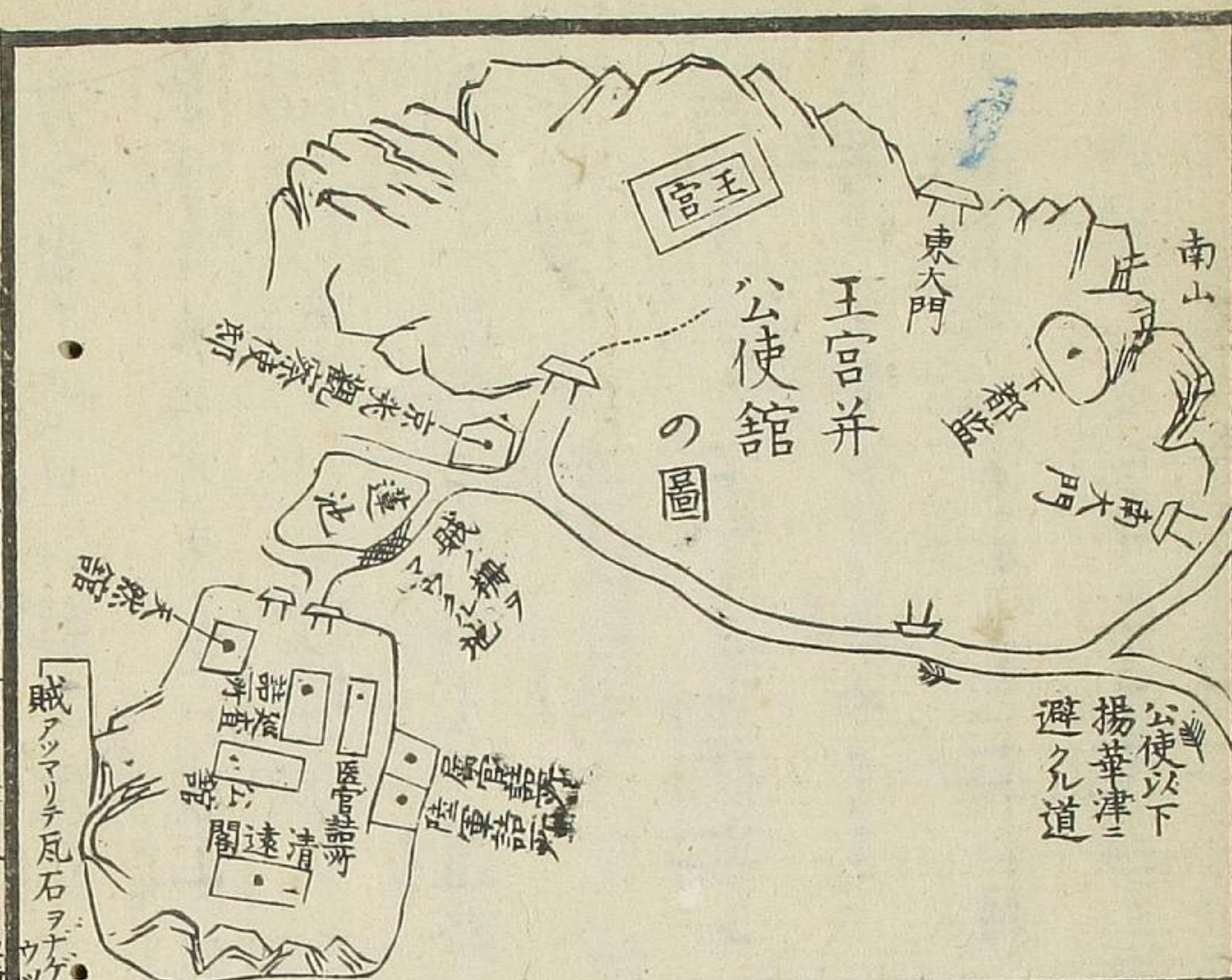
010190514477

- 義士銘々傳 十八ヶ條 一冊
- 武田軍記 一冊
- 大日本東西軍記 二冊
- 諸國英雄軍記 二冊
- 報國大和魂 四冊
- 田宮坊太郎一代記 一冊
- 天帥軍記 二冊
- 豊臣太閤記 四冊
- 鹿兒島軍記 十冊
- 大坂夏冬御陣 四冊
- 七體名頭字盡 一冊

- 楠公三代記 十冊
- 會津軍記 二冊
- 櫻田講談 二冊
- 日吉丸一代記 二冊
- 白石晰一代記 一冊
- 伊達大評定 三冊
- 平井權八一代記 二冊
- 改正世界國盡し 一冊
- 教草七ツいろは 一冊
- 延壽百人一首 一冊
- 大日本海陸里程全 一折

東京 日本橋通三丁目十三番地
丸屋 小林鐵次郎板

明治太平記 廿四編出版
定價廿三錢



御届明治五年八月十四日編輯人 日本公使館正司 岡本竹二郎 出版人 全區通三丁目 小林鉄次郎

